



# 学校便り

## 長崎市立日見中学校

第17号

令和5年11月7日

文責 校長 山本

### 【第43回少年主張大会】(第16号のつづき)

「平和の発信者として」 2年 松尾 咲良

長崎は、原爆を落とされた県として、平和に対する取組に他県よりも力を入れている。その取組の一環として、8月17日に行われた青少年ピースボランティアによる平和の集まりに私は参加した。そこには、約30の中学校から代表者が来ていた。その中の山里中学校の生徒の言葉が今も私の心に残っている。彼女のいる山里中学校では、修学旅行で長崎を訪れた学生さんなどのガイドをし、平和の尊さを伝える活動をしたそうだ。その中で彼女は、「平和を山里から、平和を長崎から広められるような活動を行っている。」と言った。

日見中学校は、9月15日を「平和を考える日」として、全校で平和の灯キャンドルを作ったり、平和を願う英語のメッセージをつづした風船を空に飛ばすピースバルーンリリースを行ったりした。また、大きなキャンパスに全校で平和を願う絵を描く「キッズゲルニカ」の制作にも取り組んだ。様々な活動を行ったことで、生徒一人一人の平和を大切に想う心が、この「平和を考える日」の前よりも深まったように思う。また、キャンドルに火が灯される幻想的な景色を共に見たおかげで、友達との仲もより深めることができた。そして、今あるこの日常がいかに大事かを学び、心から平和を願うことができた。一方で、平和の集いへの参加や、平和を考える日の取組を通して、私にできること、するべきことがもっとあるのではないかと考えた。今の長崎市の現状をただ祈るだけで変えるのは難しいだろう。被爆者の方々の高齢化が進み、直接被爆者の声を聴ける機会が減ってきている。そんな中で、他県からは、8月9日や8月6日が何の日か尋ねられたら答えられるのだろうか。そもそも県内の人でも長崎市外の人たちは、被爆の実情をどこまで知っているのだろうか。そう考えて不安になることがある。「平和を考える日」、日見中学校にはウクライナからビデオメッセージが届いた。ウクライナは今まさにロシアと戦争をしている。危険と隣り合わせの中で、発信者のハンナさんは次のように話した。「平和という言葉の意味を深く理解できるのは戦争を体験したその人、その国だけです。」と。今、悲惨で残酷な戦争を体験した人はこの国に何人いるのだろうか。数少ないその人たちがいなくなってしまう、戦争という過ちがもう一度繰り返されてしまったら、この国はどうなってしまうのだろうか。もう二度とあのような悲惨なことが起きないように、そしてまた他国の人々も傷つけないように、平和を願い、行動を起こしていきたい。

私は、平和の集いでこの思いを他校の人たちに伝えた。すると、ほとんどの人が、同じ思いを持ち学校として行動を起こしていることが分かった。また、青少年ピースボランティアの人たちは、長崎や広島が受けた原爆の被害だけでなく、沖縄が戦争でどのような被害を受けたのかなどを調べて、実際に現地へ赴いていることが分かった。そして、テレビで聞いた情報によると、原爆資料館の展示が新しくなり、日本が他国へ与えた「加害の歴史」の展示を追加するか検討されているそうだ。今、長崎は自分たちが受けた痛みだけでなく、他県が受けた痛み、そして日本が他国に与えた苦しみを伝えようとしている。私はこのような活動にこれからも積極的に取り組み、平和の大切さを発信していきたい。今ある平和な日常は、昔、悲惨で残酷な戦争を体験し、平和の尊さを訴えてくれた人たちがいるから存在するのである。平和が当たり前となった日々を、これからもずっと続けていけるように、私はこれからも、過去を知り、平和の尊さを「発信」して、未来を変えるための活動を行っていきたく思う。現在私たちが持っている考えや起こした行動の一つ一つが未来へとつながっていくのである。皆さんはどんな未来にしたいですか？ 今一度、一緒に考えていきませんか？



(進行役の中学生の皆さんです)



(発表者の小中学生)